

ス
ロ
ー
バ
ラ
ード
—
—
晚
い
春
—
—

向かいのブティックを斜に眺めて、「喫茶ショコラ」前の角に立つ。

夜の帳が降りた路上には四方からさまざまな光が錯綜しあつて綾を織り成し、スクランブル交差点を行き交う人々の足元には白いゼブラの迷路がある。

迷路を渡る人々が交わす言葉もまた、迷路だ。行き着く先の名前も知らない。

——名より、実だろう？

そんな信条を証明したがってでもいるように、性急に身体を重ね、名前も告げずに去っていく男が多い街だった。

街路樹の桜が枝の先に僅かばかりの花を咲かせているのは、モノクロームの都会に多少なりとも色を加えようとしてのことだろうか。遅咲きの花が花びらを散らす路の上で、仁科明宏はその夜もいつものように、迷路を進んでは消えていくコマたちの動きを目で追いつ眺めつしていた。

見ているうちにコマのひとつが流れに足を止めた。

群れから抜き出た頭がひとつ、人々の急流に逆らう岩となつて立ち止まっている。その男が顔をこちらへ向けているのは、値踏みするように自分の様子を窺っているからなのだと、五分前から同じように見ぬふりをしつつ男を観察していた明宏にはわかった。

互いの関心の方向性が明白になったとき、男は思い切りをつけたように歩き出した。

男が来る。

なんと言つて声をかけてくるか、自分を相手に賭けをする。

月並に時間を尋ねてくるか。それとも……

「一人？ 暇ならいっしょにお茶でも飲まない？」

笑えてくるほどベタなセリフ。相手がこれほど男前じゃなかったら洩も引っかけずにスルーしているとところだ。お茶

する店がそのまんま目の前の「喫茶ショコラ」というのも、笑いを通り越して泣けてくる。

そうは言っても、かけられたセリフに難癖をつけるほど自分を高い売値で出してるわけじゃない。行こうか、と踵を返す男の後について、甘ったるい名前の店へ足を踏み入れた。

足元から下が素通しに見える螺旋階段を二階へ登ると、夜の色よりは少しばかり明るい店内が開けてくる。窓際に席を決めて向かい合わせにシートへ腰を降ろした。

ご注文は。

俺は紅茶。君は。

ブレンドコーヒー。

熱の無いそんなセリフがやり取りされる。本当はこの場にいる三人のうちの誰一人として飲み物の種類になど関心はないはずなのに。

だがひと通りの儀礼を済ませて店員が去ると、残された二人の間の空気は幾分か打ち解けたものになった。二重のはつきりとした目が熱心に動き、真正面から明宏を捕らえる。

「ここはケーキもおいしいよね。甘いもの好きなら頼もうか？」

「きらいじゃないけど今はいい」

「お茶より食事のほうがよかった？」

「いや、ほんとに。そういう気分じゃないし」

「そうだね。ここでフルコースっていうのもね……」

意味ありげに男が片方の口角を上げると、口の端から1センチほど離れた頬の部分にくつきりとした笑い皺が寄った。まだ頬に刻みつけられるだけの年月を経っていない、笑顔を作ったときにだけ現れる一瞬の皺。

二つ三つ年下かな、と明宏は思った。